

## 保育者にとっての森

—自然保育実践演習における森に対する4つの視点—

麻 生 翼

名寄市立大学 保健福祉学部 社会保育学科  
社会保育実践研究 第6巻 別刷  
2022年3月



## 保育者にとっての森 —自然保育実践演習における森に対する4つの視点—

麻生 翼\*

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科非常勤講師／NPO 法人 森の生活)

キーワード：自然保育、森のようちえん、森林

### はじめに

近年、自然環境の中で幼児教育や保育を行う「自然保育」が注目され、全国的な広がりを見せている。自然保育は、森、海、川、畑、都市公園など様々な場所で活動が展開されているが、森はその中でも最もよく利用されるフィールドだろう。日本は国土面積の約7割が森林を占めており（O E C D諸国の中ではフィンランドに次いで世界第2位の森林率を誇る）、森林での自然保育に取り組みやすい環境にあると言える。

本学社会保育学科においては、自然保育を実践的に学ぶ授業として「自然保育実践演習」がある。本授業は「子どもの発達と自然の関係について理論的に学び、地域の自然環境を生かした保育実践を構想し、実践的に学び、方法を習得することを目的」とし、室内での講義と野外での活動を通じて実践的な学びに取り組んできた。発達心理学の専門家である河崎道夫は、人は人の中だけで育つではなく、「子どもたちを自然を含む豊かで多様な世界に開きいざなうことが保育の重要な課題」<sup>1</sup>であり、このことによって共感と憧れを土台とした人間関係を構築することが可能であるとしている。この課題に答えるべく自然を適切に教材化するためには、保育者が自然に対する深い洞察を有していることが必要である。

しかしながら、若年層の自然体験不足<sup>2</sup>が指摘されているように、保育者自身に、自然体験の経験や自然への理解が必ずしも十分にあるわけではない。そのため、保育者養成課程において自然保育を取り上げる際には、学生の現状を踏まえた上で、自然の中での豊かな経験や、自然に対する認識を適切に深められるような学びの機会づくりが必要である。だが、そもそも自然に対して保育者がどのような視点を持つべきなのかについては、十分な議論がなされていない現状にある。

そのため、本稿は、保育者が自然に対する洞察を深めるために、特に森林に対してどのような視点をもつべきか、自然保育実践演習での実践を参考にしつつ提示することを目的とする。保育者にとって、森とは何だろうか。この問い合わせについて考えるきっかけになれば幸いである。また、学生の期末レポートを一部掲載し、その内容から、学生が本授業を通じてどのような学びを得たのかも分析する<sup>3</sup>。

本稿はまた、森林に対して理解を深めたい保育者およびその養成過程にある学生が、その導入として利用することも想定して作成した。本文で概観を把握し、興味のあるテーマについては文末の注記や参考文献を参考にしてさらに学びを深めていただければ幸いである。

### 1. 名寄市および本授業で使用した野外フィールドの立地および自然環境の特性

まず、本授業の実践で利用したフィールドの立地と自然環境について確認する。

名寄市は天塩川と名寄川の合流する地点にあり、東部には北見山脈が、西部には天塩山脈の支脈である雨竜山脈に挟まれた盆地に位置している。天塩川には毎年日本海から 200km 以上の長距離にわたってサクラマ

\* 責任著者

麻生 翼 aso.tsubasa@morinoseikatsu.org

スが遡上するなど貴重な自然環境を有している。市の面積に占める森林の割合は62%である。

野外実践のフィールドとして使用したのは4つのフィールドで、名称、特徴、大学からの所要時間はそれぞれ、下記のとおりである。

- ・大学公園・・・街中の公園（徒歩3分）
- ・なよろ健康の森・・・郊外の森林公园（自転車で15分）
- ・美桑が丘の森・・・間伐体験や焚き火のできる自由度の高い森林（自動車で20分）
- ・北海道大学雨龍研究林・・・広大な原生林を有する研究林（自動車で30分）

このように、人の手の加わった人工的な要素の強い身近な公園から、ほとんど人の手の加わっていない原生林まで、自然度の幅をもったフィールドを選定した。とりわけ、総面積249平方キロメートルで広大な原生林を有する北大雨竜研究林は、開拓前の北海道の風景を残す大変貴重なフィールドであり、このような場所へ車で30分でアクセスできる環境は稀有であり、本学が野外フィールドでの学びを日常的に取り入れる上で大変恵まれた環境にあると言える。

## 2. 森林に対する4つの視点

ここで、保育者が森林に対する洞察を深めるために持つべき4つの視点を提示したい。それは、「森林の生態」「森林の社会的役割」「全体性を持った自然としての森林」「子どもの遊ぶ場としての森林」という4つの視点である。以後、それぞれについて詳述したい。

なお、この4つの視点はそれぞれが独立しているわけではなく、相互に関連し合っており、ある視点の理解が他の視点の理解を深めるため、複合的に獲得することが望ましいことを捕捉しておきたい。

### 視点1：森林の生態について

まず、森林をその生態から捉える視点について確認したい。森林の生態の基本的な性質を理解することは、自然保育におけるフィールドの理解として欠かせない視点であり、知れば知るほど、森林の持つ奥深い世界の広がりと、その持続する仕組みに驚嘆するだろう。

森林は、樹木だけで成り立っているわけではない。樹木の落とす葉は土壤1g中に数百万から数千万いるとも言われている微生物の食糧となり、この目に見えぬ労働者たちの働きによって豊かな土壤が育まれ、樹木の成長を助けている。樹冠と呼ばれる葉の茂っている空間は昆虫や鳥たちの棲家となる。木の実は鳥類・哺乳類たちにとっての餌であり、樹木にとって彼・彼女らは動けない自分に替わって種子を運んでくれる大切なパートナーでもある。一生を遂げつつある樹木は次第に腐朽菌の菌糸によって柔らかくなり、その木部には蟻たちが巣をつくったり、カミキリムシの幼虫のベッドになったりする。私たちが時折森で耳にするトトトト…という連續音は、これらを啄みにやってきたキツツキが小刻みに樹木を叩く音だ。そしてこれらを支える偉大な母とも言える存在が、1億5000万km<sup>2</sup>彼方から絶えずエネルギーを注いでくれる太陽である。

このように、森林は、多様な生物が有機的につながった、太陽エネルギーによって自律的に駆動するシステム—生態系として存在している。そのため、それぞれの生物種の生態を理解する際には、他の生物や環境との関係性とともに理解することが重要だ。そのような関係性の中で個々の生物を捉えられるようになると、次第に、森が、様々な登場人物の織りなす無数のドラマが展開する舞台のように見えてくることだろう。

また、植生遷移と呼ばれる、森林が時間とともに変化していく現象についても理解しておきたい。植生遷移について理解を深めると、森林の過去と未来を見通すことができるようになる。目の前の森林の過去を推測できると、その土地の歴史や、その森林が現在の形をとっている理由を推し量ることができる。そうすると、擬人化した表現ではあるが、その森林の性格のようなものを理解することができる。一方、その森が今後どのように移り変わっていきそうかという未来に対する見立てを立てると、フィールドとして整備するよ

うな場合に、どこに道をつけるべきか、どの木を伐れば良いのかを選択する際の拠り所になる。

植生遷移の初期の状態は、伐採跡地のような裸地からスタートする。このような場所には、まず、成長は早いが寿命がそれほど長くはない「陽樹」が主体となった森林が形成される。北海道においてはシラカバがその代表格で、「パイオニアツリー」と呼ばれる所以である。土砂崩れや伐採跡地に形成される「二次林」と呼ばれる森林にシラカバが多いのはこのためである。次に、ミズナラやイタヤカエデなど陽樹よりも耐陰性の高い樹木が育ち、次第にこれらの樹種に優先種がおきかわっていく。最後に、アカエゾマツ等、もっとも耐陰性が高く、成長は遅いが寿命の長い「陰樹」が優先し、このようにして数百年スケールで「極相林」と呼ばれる状態へと移行していく。実際にはこの遷移の過程で、さまざまな要因で部分的な攪乱が起こるため、その都度その場所では遷移の過程が前の段階に戻ることで、森林全体としてはさまざまな段階の森がモザイク状に入り混じり、複雑な構造をとることになる。

このように、森林を生態的な視点で捉えるためには、森林が様々な生物の関係性によって成り立っていること、そして遷移初期状態から極相林へという長い遷移の過程の中にあるものとして捉えることが重要である。この視点を深めることで、森林において無駄なものはなにひとつなく、すべての生き物にはありのままでその役割がある実感を得ることもできる。多様性と調和が表裏一体の関係にあるという感覚は、子どもたちとつくりあげる世界を構想する拠り所にもなるだろう。「みんなちがってみんないい」世界は、目の前の森の中に生態系として展開しているのである。

このような視点を学ぶためには、まずはフィールドに出かけて興味をひくものを調べてみること、そしてできることなら普段から自然に関わっている人と一緒に森を歩いてみることをおすすめしたい。自分の知らない森的一面をきっと知ることができるはずだ。そして興味が湧けば、図鑑や様々な書籍を読んでみるとより奥深い世界を知ることができるだろう<sup>4</sup>。

本授業では、教室内での森林生態に関する講義やフィールドごとに様々な体験活動を行なった。手軽にアクセスできる大学公園では、シラカバの開花から結実までの観察や、「見つけた春」をテーマに学生各自がスマートフォンで撮影した画像をアプリで共有するなどの活動などを行った。1年の中でもとりわけダイナミックに自然が変化する春先には、定期的に同じ場所に出かけることで、短期間でも驚くような変化が起こることに気づくことができた。北海道大学雨龍研究林では、専門家の説明のもと原生林を散策した。開拓前の北海道の原生的な自然が残る、今となっては大変貴重な景観の中に身を置きながら、倒木の上で種子が発芽する倒木更新の様子や、冬季のスノーシュー散策では雪についた様々な動物の足跡など、観察した様々な現象を通じて、関連知識を学ぶことができた。

## 視点2：森林の社会的役割

次に、森林を社会的な役割を持ったものとして捉える視点について確認したい。近年、森林は、自然保育での利用のみならず、社会的に様々な役割が求められており、人々との関係の中で社会的に森林を捉えることも重要な視点の1つである。そして、人々と森林の関係は時代とともに変化してきたことから、森林の現代における社会的な役割を深く理解するためには、その歴史的な変遷を踏まえて把握することが重要である。進化の過程で地球上に樹木が誕生したのが2-3億年前、人類が誕生したのは20万年前と言われている。両者が誕生してから少しずつ積み重ね、そしてまた変化してきた関係性について、縄文時代から遡ってその概観の把握を試みたい。

縄文時代、人々はすでに生活具に用途に応じて樹種ごとに木材を使い分け、山、川、海から季節ごとに食料を得るなど、自然の恵みを持続的に利用していた。木材だけでなく、クルミ、クリ、ドングリ、トチノキ等の種実の利用の他、ウルシの漆器への利用や、植物資源を編組製品や繊維製品の素材植物としても活用しており、実際には狩猟採集のみに依拠して生活していた訳ではなく、集落の周辺で植物資源の管理も積極的

に行いながら生活していたとされている<sup>5</sup>。

本州では、弥生時代に入ると農耕中心の生活となるが、建築物の材料として、農耕に安定的に必要となる水の水源地として、また生産力保持のための肥料を得る場として森の重要性についての認識を深めていった。以降、人口増加や燃料としての薪需要の増加、土木技術の発達に伴い木材の乱伐が進み、全国的に過剰伐採による「はげ山」化が起こる一方で、集落単位で森林の利用を自主的に制限することで利用と保全の両立を図る「入会」とよばれる共同利用形態も生まれた。山村地域には、燃料に必要な薪炭や田畠の肥料に漬き込む草や落ち葉を採集する森と生活の場が密接につながる「里山」が形成され、商品経済の発達に伴って木材、薪炭、山菜・茸・薬草、漢方薬（熊の胆、木の根・皮、茸等）、和紙、木蠟、絹糸・絹織物、鳥羽・毛皮・獣肉、石、鉱物などの品を生み出すために、マタギや本地師（ろくろを使って、木製の日用品をつくる人々）、炭焼き、たたら師（製鐵師）、養蚕・機織り、製紙、鍛冶、製蠟、竹細工など森の恵みを生かした多様な仕事が生まれた<sup>6</sup>。しかしながら、明治以降、立身出世觀の広がりから多くの若者が中央を志すようになつたことで人材が地方から中央へと流出し<sup>7</sup>、さらに、戦後の化石燃料の普及や営農形態の変化、重化学工業の発展に伴って里山における活動は次第に衰退の途を辿った。

北海道では、本州で弥生時代以降に農耕が普及した以降もアイヌはその文化を受け入れず、周辺の異文化の人々と交流しながら狩猟採集中心の生活を営み続けた<sup>8</sup>。動物や植物の食料としての利用はもちろん、ヒグマをはじめとする動物の毛皮の利用、オヒヨウやシナなどの樹皮の繊維を使ったアットウシと呼ばれる衣服など、森林を利用する独自の技術を培い、アイヌは森をはじめとする自然とともに生きる文化を形成したと言える。しかしながら、明治政府による北海道の内国化とともにこのような生活文化は薄れ、さらに開拓により多くの原生林が伐採されることとなつた。今となっては大変貴重な、両手では抱えきれないような大径の天然木がこの頃に大量に搬出された。伐採跡地は、農地としての利用や、トドマツや本州由来のカラマツなど針葉樹の植栽による人工林への置換、そしてシラカバなどの陽樹を主体とした二次林へと置き換わった。このため、現在、北海道には原生林と呼べる場所はごく限られた場所にしか残っていない。

明治に入ると国家による森林政策がスタートした。急速な近代化に伴って木材需要が増加し、全国各地で濫盜伐が横行したため、1897年（明治30年）に監督取締法規として「森林法」が制定された<sup>9</sup>。1964年（昭和35年）には、第2次世界大戦後の木材需要や高度経済成長を背景に、産業としての林業発展の旗印を掲げた「林業基本法」が、2001年（平成13年）には、それまでの木材生産を主体とした政策を抜本的に見直した「森林・林業基本法」が制定され現行に至る<sup>10</sup>。「森林・林業基本法」とそれまでの政策の違いは、林業生産中心の政策から、森林の持つ様々な機能である「多面的機能」の持続的発揮を図る政策へ転換したことである<sup>11</sup>。つまり、当初は木材供給の場として主として経済的な側面として捉えられていた森林は、次第に多面的な機能を有する資源として捉えられるようになったのである。また、このような近代化の過程で、先に述べた山林の共同利用形態である「入会」は解体されていった。

さて、現代における森林の社会的役割とも言える森林の多面的機能とは、一般的に下記の機能として整理されている<sup>12</sup>。

- ・生物多様性保全・・・遺伝子保全、生物種保全、生態系保全
- ・保健・レクリエーション機能・・・療養、保養、レクリエーション
- ・地球環境保全・・・地球温暖化の緩和、地球気候システムの安定化
- ・快適環境形成機能・・・気候緩和、大気浄化、快適生活環境形成
- ・土砂災害防止機能／土壤保全機能・・・表面侵食防止、表層崩壊防止、その他の土砂災害防止、土砂流出帽子、土壤保全、その他の自然災害防止
- ・文化機能・・・景観（ランドスケープ）・風至、学習・教育、芸術、宗教・祭礼、伝統文化、地域の多様性維持（風土形成）

- ・水源涵養機能・・・洪水緩和、水資源貯留、水量調節、水質浄化
- ・物質生産機能・・・木材、食糧、肥料、飼料、薬品その他の工業原料、緑化材料、観賞用植物、工芸材料

森林管理においても、上記の多面的機能それぞれを最大化することが望ましいとされているが、実際に多面的機能のすべてを同時に最大限発揮するような、「あるべき森林の姿」を明確に定めることは大変難しい。というのも、森林の発達段階（若齢段階・成熟段階・老齢段階）や種類（人工林・天然林など）によって、発揮される機能が異なるからである。例えば木材生産機能に限って言えば、成長量の大きい若齢段階から成熟段階に移行する時期での伐採を繰り返すことがその機能を最大限発揮させることになるが、生物多様性や水源涵養といった比較的老齢段階で最大化する機能は逆に損なわれることになってしまう<sup>13</sup>。多面的機能の発揮と一口に言っても、誰にとっての価値なのか、また何を期待するのかによって最適な森林の状態は様々であり、したがって、多面的機能の発揮にあたっては、様々な立場の意見が機能間のバランスをとりながら反映されることが望ましい。

森林の持つ多面的機能は、近年、国際的にも大きく注目を集めている。その重要な契機の1つは、2015年、国連サミットによる「持続可能な開発のための2030年アジェンダ」（SDGs）の採択である。森林は、生物多様性保全（目標15「陸の豊かさも守ろう」）はもちろん、水源涵養機能によって綺麗な水を生み出すとともに（目標6「安全な水とトイレを世界中に」）土砂災害の防止にもなる（目標11「住み続けられるまちづくりを」）。化石燃料から木質バイオマス燃料への移行は再生可能エネルギーの普及となり（目標7「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」）、森林保全や木材の使用による炭素固定は大気中の二酸化炭素を減らす（目標13「気候変動に具体的な対策を」）。ここに挙げたもの他にも、森林はSDGsの掲げる多くの目標達成に貢献を果たす点で注目を集めており、ESG投資<sup>14</sup>の広がりもこの動きを加速させている。

このような視点を学ぶために、本授業では、森林と人々の関係の歴史的変遷の解説の他、フィールドでの山菜の解説や狩猟の観察など、森林の生態的な側面や環境教育の場としての利用に限らず、幅広い森林の利用形態について触れることを配慮した。在宅でのオンライン講義の際には、部屋の中にある木から生まれたものを写真に撮って共有した後で木材の構造に関する講義も行なった。保育現場における木育<sup>15</sup>ニーズの高まりもあり、このような木材としての側面に理解を深める機会は積極的に持つと良いのではないだろうか。また、北大雨竜研究林の見学の際には、その朱鞠内湖造成の歴史や研究林が開拓を免れた経緯なども聞くことができた。私たちの暮らしが、意外なところで森につながっていることへの気づきや、森林とともに暮らした文化から現代社会を振り返る機会をつくりたい。

### 視点3：全体性を持った自然としての森林

次に、「全体性を持った自然としての森林」についての視点を取り上げたい。これは、森林をはじめとする自然に対して、自然を人間と切り離したものとして対象化せずに、精神的なものも含めて全体的なつながりをもって自然と関係を結ぶ視点のことである。このような関係の結び方こそ、子どもが自然の中で経験する感覚に近いものであり、自然の中で子どもに関わる大人にとってなくてはならない視点だろう。先の2つの視点と比べて視点そのものについて説明が必要に思われるため、全体性を持った自然と対象化された自然の違いについての説明から始めたい。

環境倫理学者の鬼頭秀一は、人間や自然をそれ自体が独立して存在する実体としてではなく、それぞれがその関係性の中で存在しているという認識から出発し、人間と自然の関係の結び方について2つの様態を対比して説明している<sup>16</sup>。一つは、自然との経済的・社会的なつながりと文化的・宗教的なつながりが、生活や生業の中で分断されずに、人間と自然を切り離さずに総体として関わるような関係の結び方である。このような関係から結ばれる自然を、本稿では「全体性を持った自然」と呼ぶ。これに対し、もう一方は、自然と

の経済的・社会的なつながりと文化的・宗教的なつながりが分断され、人間と切り離された自然に対して部分的に関わるような関係の結び方である。このような関係から結ばれる自然を、本稿では「対象化された自然」と呼ぶ。

自然に対し特定の機能を期待する視点は、自然を「対象化された自然」として捉えていると言える。先に見たとおり、森林は時代とともに様々な社会的ニーズに晒されながら次第に多様な価値が認められるようになった。これは、木材生産など特定の機能に偏った期待がかかり過剰利用がなされることに比べれば、様々な機能を認めそのバランスを図るようになったという点で、資源利用の観点から見れば大きな進歩というべきであるが、森林と人々の関係の多様さという観点から見れば、いずれも自然を対象化して捉える視点の中で展開していると言える。特定の機能を取り上げて部分的に関係を結ぼうとする視点の中には、社会的・経済的なつながりや文化的・宗教的なつながりをそれぞれ個別に見出すことはできるかもしれないが、両者は分断されている。

一方、先に見たアイヌ文化はまさに全体性を持った自然と関わりを築いていたと言える。アイヌ文化に見られる「熊送り」は、アイヌモシリ（人の世界）にヒグマの姿で遊びにきたカムイ（神）の魂を、天上のカムイモシリ（神々の世界）に送り返すお祭りである。これは、単に送り返すだけでなく、生けどりして一定期間飼育した子グマや捕殺したヒグマを、丁重に神々の世界に送り返すことで、ふたたび肉や毛皮などを持って人間の世界に戻ってきてほしいという願いが込められており、ここには、文化・宗教的なつながりと、食料を得るという意味での経済的・社会的なつながりが一体となった自然と人々の関係があると言える<sup>17</sup>。学者の梅原猛は、森の文明とも言うべき縄文文化や狩猟採集文化が日本の基層文化を形成しているとし、その精神的特徴について、人間は自然のなかでは何らの特別な権利ももっていない一員であるという「平等の原理」と、人間も動物も植物もすべてあの世とこの世の絶えざる循環を繰り返すという「永遠の循環運動」という2つに見出しており<sup>18</sup>、そこにはやはり全体性を持った自然が展開していたと言うことができる。

また、学者の内山節は、かつて日本の山村において村人たちが様々な伝統行事を通じて、自然の世界と人間の世界が連続し一体的に展開している世界をたえず再構成し続け、そのことによって、人間だけでない自然も含んだ自治を基盤とした共同体の営みが展開していたことを指摘している<sup>19</sup>。また、「自然」をシゼンと読んで人間の外に展開する自然の世界を指す言葉として使い始めたのは、外来語の nature を翻訳するところから発生し、それ以前の日本では自然界をまとめて外的対象としてとらえる言葉がなく、自然と人間を分けてとらえる発想は無かった<sup>20</sup>ことも指摘しており、かつての里山において自然と人々がどのような関係を結んでいたのかを考える上で大変示唆深い。

このように、明治以降の近代化の中で、全体性を持った自然が展開する領域は狭まってきたと言えるが、人間という存在が全体性を持った自然と関係を結ぶことのできる存在であることは忘れてはならず、むしろこのような関係性を結ぶことのできる感覚を土台にして初めて、対象化された自然に対する対処は適切に為され得るのではなかろうか。

では、現代において我々はいかにして全体性を持った自然と関係を結ぶ感覚を養うことができるのだろうか。

最も身近な方法として、自然の中での「遊び」がその重要な位置にあるだろう。子どもたちが遊びの中で自然と関係を結ぶ時、そこには全体性を持った自然がいきいきと展開している。例えば、子どもが一本の枯れ木を持って何かの道具に見立てる時、そこには、自然物に用途を見出すという社会的・経済的なつながりの萌芽とともに、その色彩や触感、そしてその行為そのものに対して、わくわくするような、神秘的な驚きともいえるような、文化・宗教的なつながりに通じる原初的な感情が一体となって現れている。

レイチェル・カーソンの生み出した有名な言葉「センス・オブ・ワンダー=神秘さや不思議さに目を見はる感性」は、まさに遊びの中での全体性を持った自然への眼差しを表現している。レイチェル・カーソンは、

「生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮にたまちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」と語るが、この感動は、「そばにいる」大人が全体性をもった自然へのまなざしを持ってはじめて分かち合うことができるだろう。

また、子どもの頃の地域の自然との関わりは、成長後の環境に対する認識や、世界観の基盤になるとも言える。イディス・コップは、自然の中での子どもの遊びは、「創造的な学習と環境への宇宙詩的な探索」であり、「子どもは、体験の心象を読み取り、そして後になって形式的に固定化され、理性化された知識体系では見落とされるような関係性の論理を、言葉以前にしばしば知覚する」<sup>21</sup>と述べている。生活を営む場である地域において、幼少期からの自然との交感は、その土地における持続可能な生活様式を構想する上でも重要であると言える。大正時代、長野県の学校教諭であった三澤勝衛による、野外での徹底した対象の観察「野外凝視」による地域風土の深い理解、「地域発見」と「自己発見」を基礎とした学びの実践も大変示唆深い<sup>22</sup>。

本授業では、原生林を散策する、1人で森の中で静かな時間を過ごす、枝を集めて自分で火を起こす、間伐をしてそれを運び出して利用する、森の中で自由に遊ぶなど、地域の自然との様々な関わりを持つ機会をふんだんに散りばめるように心がけた。自然是自分自身の心の写し鏡のような存在でもある。ふとした瞬間に、これまで感じたことのない自然の新たな相貌に気づく時、それは新しい自分自身との出会いも意味している。概念を理解するのではなく、経験を通じて気付き、感得するという形で獲得される視点である。

#### 視点4：子どもの遊ぶ場としての森林

最後に、子どもの遊ぶ場として森林を捉える視点について取り上げたい。自然保育のフィールドとして、森林という場所が、他にはないどのような特徴があるのか理解したい。

まず、森林の持つ多様性が、子どもの多様性を受け入れるという点が挙げられる。子どもたち一人一人には個性があり、興味も異なる。森林は一人ひとりの興味に応えうる多様性を持っている<sup>23</sup>。したがって、森の中での遊びは、各々の関心に合わせて、各々のペースで取り組むことができる。一人でも遊べるし、集団でも遊ぶことができる。そのような自由さは森ならではである。本授業では、なよろ健康の森で森林環境教育プログラムLEAF<sup>24</sup>の体験を実施した。この活動では、一人ずつ気に入った紅葉した落ち葉を手に取って、オリジナルの色の名前をつけて全体共有したが、自然には一つとして同じものはないということ、そのことが楽しさや美しさを生み出していることにも理解を深めることができた。

また、森林にある素材は、一般的な玩具と異なり用途が限定されていない。したがって、森で遊ぶためには常に子ども自身がそこに意味を与え続ける必要があり、だからこそ無限の可能性が広がっている。決められたルールもないため、子どもたち相互のコミュニケーションが自然に発生することになる。もちろんその分、争いも起こる。このような想像性やコミュニケーションが引き出されることで様々な経験を積めることも、森の特徴であると言える。

また、脳の発達という観点からも森林での遊びの有効性が指摘されている。認知、記憶、判断等の知性を支える前頭連合野は幼児期で著しく高い感受性を示し、8歳ごろをめどに止まる<sup>25</sup>。この期間に多様な刺激を受けることが望ましく、森林のもつ多様な刺激は五感を十分に刺激し、感覚を発達させる<sup>26</sup>。

最後に、森林におけるリスクについても触れておきたい。森の中には様々な危険もある。例えば、物理的なリスクを引き起こす落枝の可能性のある枯れ枝は、事前に取り除いておくことが望ましい。また、ウルシなどかぶれの原因となる植物、ハチ、マダニ、ヒグマといった、時として人間にとつて有害になり得る生物もいる。このような危険生物については、単に恐ろしいと考えるだけでなく、正しく恐れる必要がある。生物の住む森に人間がお邪魔しているという考え方を持って、その生態を理解する姿勢が必要である。子どもたちの自発的な行動ができるだけ制限しないようにすることを心がけながら、致命的なリスクを取り除くこと

を心がけておきたい。これらは特に、現場での経験がものを言う。危険生物の存在に気づけること、葉のついていない冬季であっても樹上で枯れている枝を見発見できることを始め、子どもたちの様々なチャレンジを受け入れられる環境づくりや、目の前で展開している活動が孕んでいるリスクを適時察知し適切に取り除くことなど、経験に基づいた判断と行動が必要である。本授業では、フィールドに出向いて子どもにとってのリスクを確認することや、危険生物について学生たち自身でチームごとにその生態を調べ互いに発表する活動も行なった。

### 3. 「自然保育実践演習」の学生たちの期末レポートに見る学びの視点

学生たちの期末レポートから一部を抜粋し、本授業を通じて、これまで挙げた4つの視点それぞれについて、どのような学びがあったのかを検討したい。便宜上、学生たちのレポートを分析せざるを得ないが、本質的には、ともに自然の中に身を置き、共に活動し、私自身も学生たちに影響を受けながら、感じたことを分かち合ったプロセスが重要である。

なお、4つの視点について次のとおり略称で表記することとする。「森林の生態」・・・「生態」 / 「森林の社会的役割」・・・「社会」 / 「全体性を持った自然としての森林」・・・「全体性」 / 「子どもの遊ぶ場としての森林」・・・「子ども」

期末レポートは、「①授業を通じて、印象に残っていること」「②授業を通じて変化した自然のイメージ」「③保育と自然の結びつきについて」の3点について自由記述するものであった。

以下にレポートの抜粋と解説を掲載する。

A. (自然のイメージについて、) 森林や川などの空間、一つの塊としてのイメージだったものが、「そこに何が在るのか」「どのように生まれたのか」環境や生命、遷移などを意識したイメージへと変わった。今まで通り単純に「森」としてみると、研究林も健康の森も同じく”自然”になるが、様々な観点から考えてみるだけで、全く違うものだということに気づく。当たり前なことのように感じるかもしれないが、なかなか気づけないことではないかと思った。

自然に対する解像度が上がったことが見受けられる（「生態」）。また、同じ森でも「様々な観点から考え」（「社会」）、違いに気づくことができるようになった。

B. 雨竜研究林に行った際に人工林と天然林の間 [=天然林施業のこと（筆者注）] を研究されているというお話を聞きました。保育を行う中でも色々な子どもがいてその中には障害を持っている子がいます。どちらかの方がいいということではなく、お互いにいるからこそ出来ることがあり相互に関わり合うことで、お互いににとっていい方向へと繋がっていくのだと思います。このように自然のことを知ることで、関係ないところとの結びつきがあり、考えが変わることもあると思います。自然には、たくさんの不思議であふれていると思います。人はみんな1人ひとり違うので、興味関心のある所も変わってきます。園の中で、そのそれぞれの興味関心のあることを取り入れていくことは難しいことだと思いますが、自然の中だとその難易度は優しくなるのかなと考えます。そのように考えるとそれぞれの子どもの興味関心のある場所というのは中々ないと思います。その場所が身近にある場所というのが自然だと考えます。

人が手を加える人工林的な側面と、植生遷移という天然林の側面を併せ持った天然林施業の原則を人間社会に対比させて考えることができており（「生態」「社会」）、生態的な視点が保育観にまで影響を及ぼしていることも見受けられる。

C . 大学公園に行ったことが印象に残っています。みんなで春を探しに行ったり、自然の中で保育を行う上でどのようなところに気をつけて行うべきか（こういう枝が落ちる恐れがあるから危ないなど）やふきのとうの雄しべや雌しべの見分け方、トドマツとエゾマツの見分け方などです。新しいことや発見をするためには、遠くに行かなければならぬと思っていましたがこの講義を受けてこんな身近に新たな発見や学びがあったことに気づかされました。大学公園でたくさんの発見があったので、「自分が住んでいる地域」という風に範囲を広げるともっと多くの発見があるのだろうなと考えました。自分が子どもと関わるようになったときには、まずは自分の住んでいる地域の自然から一緒に知っていき、それから地域外のところに行ったときに自分たちがいるところとどのように違うのかを比較しながら知っていきたいと考えました。身近なところから興味を持ってもらい、知ったことをお父さん、お母さんと話したりしていくことができたらなと思っています。

広大な森林でなくとも、すぐ身近な公園においても注意深く観察すれば多様な自然やそこから生まれる感動があることを体感した様子が見受けられる（「生態」「全体性」）。この経験を通じて、身近な自然理解から徐々にその空間を広げていくという保育活動のアプローチへの気付きや、保護者にも自分の言葉で伝えられるという自信もついたことが伺える（「子ども」）。

D . 私が自然保育実践演習の授業を通じて印象に残っていることはヒグマやマダニのことについて普段あまり関わることのないグループでまとめ、発表したこと（中略）である。ヒグマやマダニについて調べる前、私は「ヒグマやマダニは危険」という事実は授業でも取り上げられていたため知っていたものの、何が危険でどういう生態なのかという点は全然知識がなかった。そのためこの授業でヒグマやマダニについて調べるとなつた際はきちんと危険とされる理由を知ることが出来るということで少し嬉しかった。自分たちで調べることで知った危険な部分は確かな知識となり、3つ程度のグループに分かれ、発表することで印象に残りまた確かな知識となつたのがとても良かった。

自然保育につきものの危険生物のリスクへの対応について、その生物を単に恐れ拒絶するのではなく、生態を調べることで理解を深め、適切な対応をとることができる（「生態」「子ども」）。保護者への説明という点でも、やはり科学的な知識に基づいた対応が欠かせないだろう。

E . 私はこれまで虫が大の苦手だったため、虫がたくさんいると予想される自然豊かな場所はできるだけ避けて生活してきた。（中略）先生方の丁寧な説明によって、自然は思っていた以上に自分が生活の中で利用しているものに変わっているということがわかった。落ち葉を踏む音や甘いにおいのする木などを自分自身が体感することができ、あれだけ生活の中から遠ざけてきた自然が、自分にとってリラックスできるものだと感じられるようになったことに驚いた。虫の苦手は克服することはできていないが、この授業を通して自然のイメージは180度違った印象に感じられた。この感覚は忘れずに覚えておくべきだと感じた。

「生活の中から遠ざけてきた自然」が、「落ち葉を踏む音」、「甘いにおいのする木」などの経験を通じて、「リラックスできるもの」に「180度」変化したという。この変化のプロセスには、森林の生態を体感することや（「生態」）、「自然は思っていた以上に自分の生活の中で利用されている」という気付き（「社会」）が、自然と自分自身の関係性の変化を促した（「全体性」）と言えるだろう。

F．自然保育実践演習の授業を通じて、人間を取り巻く自然は、恐ろしいだけではないのだと、身に染みて感じることができた。(中略) 授業を通して、自然が今までより身近に感じた。そして、自然がいかに貴重で、守り、守られるべきものなのを学んだ。それと同時に、自然に対して、感謝と尊敬の気持ちが湧いてきた。大昔、人間と自然、その他の生物がそうであったように、互いに助け合い、共生していくことが大切なのではないかと考えた。人間は、一人で生きているのではない。自然の中で生かされているのだろうと考えている。

自然に対して、当初持っていた「恐ろしい」という感覚だけでなく、様々な経験を通じて、対象化された自然として「守り、守られるべきもの」であるという理解(「社会」)や、「感謝と尊敬の気持ち」や大昔の「人間と自然、その他の生物」のように「共生していくことが大切」であるという気持ち(「全体性」)へと広がったことが見受けられる。

G．森や林は普段からその姿を見てもなかなかその変化に気づくことができなかつたが、倒木更新を観て自然の移り変わりと生と死が交わる奇跡の空間に感銘を受けた。倒木の上で育つことで新しい木(命)はより光を浴びることができ、落葉にいる菌からの感染を防ぐことができる。このことから、森林においては木は寿命が来たら終わりではなく、倒木が次の世代の土台となり「生」が成り立つための重要な存在であることを学んだ。また、倒木を含め落葉、折れた木ひとつひとつに役割があり、自然には無駄なものはなく共生していることがわかり、私たちが今生きる世界の中でも無駄のない社会を目指すことが大切ではないかと考えさせられた。

倒木更新など植生遷移や生態系への理解(「生態」)を、社会のあり方に対比させて、「無駄のない社会」への構想につなげている(「社会」)。そのような考えに至ったプロセスには、森林を「生と死が交わる奇跡の空間」と捉えるまなざしのあったこと(「全体性」)が伺える。

H．この講義で1番印象に残っていることは焚き火です。(中略) 自分の力で火をつけるということは自分にとって遠い世界でまさか自分がやる方に回るとは思ってもいなかつたので不思議な体験でした。サバイバルだったり、汚れたりするのが嫌な私は絶対出来ないと思っていたし、授業が成り立たないくらい知識も技術も経験もなかつたので不安が大きかつたので、正直最初は嫌でした。しかし、今ではこの当時のその気持ちにびっくりするくらい、焚き火は楽しいものだということに気づいたし、(中略) その気持ちを教えてくれた数回の焚き火の講義は私にとってとても大きな経験になりました。私はマッチを使つたことがなかつたし、炭からの火起こしですらやつたことがなく火起こししているお父さんの姿も近くで見てこなかつたので何も出来ない知らない状態でした。ですが、この講義で火が付いていくのも流れがあることや木の選び方と組み方を学び、そして木を切る時は木目がキレイに入つてのものが切りやすい、火起こしは付き始めが肝心で難しいことを知りました。(中略) 自分の火がついた時は心から嬉しかつたし、その後自分が頑張つて付けた火で温まつたり、食べ物食べたりとても楽しかつたし、やりがいも感じた講義でした。

不安が大きく「正直最初は嫌」だった焚き火が、実際にやってみることを通じて今では「当時のその気持ちにびっくりするくらい」楽しいと思えるようになったことは、子どもがする経験を追体験したと言える(「子ども」)。また、焚き火を行うプロセスで、木の選び方や木目についての実践的な理解が深まっていることも

見受けられる（「生態」）。

I. ただの葉っぱと思っていたものでも落ち葉を踏んだら音がなる。それと一緒に土がふかふかしていることに気がついて、バリバリバリバリした音と一緒に地面が沈んでいく。そして、季節によって色が変わること、ひとつひとつ形も質、香りも違うこと、少し風が吹いたら音もなること、ヒラヒラ葉っぱが落ちてきたり、その他に森の中の道が登ったり下ったり、グネグネした道があったり、途中で橋があつたり小川があつたり、何かを大股で跨いだり、大きな迷路のように感じた。この講義で、自然の中でもいろんな遊びができる、見て聞いて触っていろんな感情になって、ドキドキわくわくした様々な体験をもできる場所へと自然のイメージが変化し、室内や身のまわりにある公園や施設、遊具で遊ぶということでは感じられない感情を感じられたり、森に行ったら異世界にいるようで目に映るものすべてが特別になる時間だった。「自然」が分からなかつたが、自然も私たちと同じようにそれぞれの感情や違いがあることを知って、自然の魅力や可能性を感じて、私たちは自然と共に生きているということを理解出来るようになった。

落ち葉や土の質感や「室内や身のまわりにある公園や施設、遊具で遊ぶということでは感じられない感情」（子ども）を感じ、自然の機微を感じとることでわくわくする気持ち、自然が「私たちと同じようにそれぞれの感情や違いがあること」の実感（「全体性」）など、森林の中での経験が多方面での気付きに影響を与えている。

J. 冬は雪の上に足跡が残るために、夏にはわからなかつた動物の行動パターンを知ることができました。ほとんどの足跡が逃げるために走った足跡ではなく、落ち着いた足跡でした。ですが、1つだけ逃げるよう走った足跡を見つけることができたのが印象に残っています。それがウサギの足跡です。休憩していたウサギが私たちが騒いでいる声を聞いて遠くに逃げていったと思われる足跡を見つけることができました。走った時のウサギの歩幅は自分の身長を軽く超えてしまうほどのもので、今までウサギに抱いていたかわいいというイメージがかっこいいにその時変わったのを覚えています。

実際には見ていないウサギについて、雪原に残った足跡からその行動パターンを推測できるようになったことで（「生態」）、ウサギに対するイメージが変わるとともに、ウサギと自分たちが影響を与え合える存在であることへの驚きを伴った面白さや喜びを感じているように見受けられる（「全体性」）。

## むすび

以上、保育者が森林に対する洞察を深めるために持つべき4つの視点を提示し、学生たちのレポートにそれぞれの視点からどのような学びが得られたかを見た。本稿に掲載できなかつたものも含め、レポートには様々な学びや自然観および内面の変化があつたことが記載されており、提示した4つの視点についても、それぞれが有機的に結びつきながら複合的な学びが立ち上がっていることが確認できた。また、いずれの視点についても、野外での体験や実践的な活動を通じた気付きが主にそのきっかけとなつてゐることは重要な点である。

本稿で提示した4つの視点は、本授業を実施する過程で整理した視点であり、今後の実践を通じたさらなる精査と改善に期待したい。今後、森林をはじめとする自然について、豊かな経験に基づいた深い洞察を有した保育者が増えることで、保育現場において自然の持つ無尽の可能性が引き出され、子どもの健やかな発達が促されることを願つてやまない。

## 注釈・参考文献

- <sup>1</sup> 河崎道夫 (2012) 「自然に共同で「対峙」する」『季刊 保育問題研究』253号 新読書社 p.21
- <sup>2</sup> 青少年教育活動研究会 (2010) 『子どもの体験活動に関するアンケート調査報告書』国立青少年教育振興機構
- <sup>3</sup> なお、学生には授業改善のための研究に、成績とは関係なくレポートを参考にする場合があることについて了承を得ている。
- <sup>4</sup> 森林の生態学に関する書籍としておすすめの書籍をいくつか紹介したい。『樹は語る』(清和研二/2015/筑地書簡) は主に北海道に自生する樹木の生態について、樹種ごとに環境との関係も含めてわかりやすく解説している。森林生態についてより深く学習したい方には、『日本の森林／多様性の生物学シリーズ』(2004-2005/東海大学出版会) や『生態学ライブラリー』(1999-/京都大学学術出版会) などがある。上記に限らず、面白そうだと思う書籍を手にとって、興味を惹くトピックを拾い読みすることから始めても良いだろう。
- <sup>5</sup> 能條修一、佐々木由香 (2014) 「遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の資源利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集 国立歴史民俗博物館
- <sup>6</sup> 井上岳一 (2019) 『日本列島回復論』新潮選書 p.119
- <sup>7</sup> 井上岳一 (2019) 同上書 p.139
- <sup>8</sup> 潑川拓郎 (2016) 『アイヌと縄文』ちくま新書 p.68
- <sup>9</sup> 遠藤日雄 (2012) 「日本における森林政策の展開過程」『改定 現代森林政策学』p.50
- <sup>10</sup> 遠藤日雄 (2012) 同上書 p.53
- <sup>11</sup> 遠藤日雄 (2012) 同上書 p.60
- <sup>12</sup> 林野庁ホームページ [https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/tamenteki/con\\_1.html](https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/tamenteki/con_1.html) (2022年2月19日閲覧)
- <sup>13</sup> 藤森隆郎 (2011) 「生物多様性のための順応的管理」『森林科学No.63』一般社団法人 日本森林学会 p.19
- <sup>14</sup> ESG 投資とは、財務情報だけでなく、環境 (Environment) ・社会 (Social) ・ガバナンス (Governance) 要素も考慮した投資のこと、短期的な利益を追求する従来の投資ではなく ESG 課題への継続的な配慮を促すことを目的とする。
- <sup>15</sup> 木育とは、子どもをはじめとするすべての人が「木とふれあい、木に学び、木と生きる」ことを目指した、北海道から始まった取り組みである。
- <sup>16</sup> 鬼頭秀一 (1996) 『自然保護を問い合わせ』ちくま新書 p.126
- <sup>17</sup> したがって、アイヌ民族をはじめ先住民族の生活文化が失われつつあることの大きな問題の1つは、単にその文化における儀礼、道具、技術が失われるということに止まらず、それらをもとに展開していた自然と人間の関係性が失われてしまうことにあると考えられる。アイヌの世界観については『アイヌ神話集』(知里幸恵/1978/岩波文庫) をぜひ参照されたい。
- <sup>18</sup> 梅原猛 (1991) 『森の思想』が人類を救う』小学館 p.191-195
- <sup>19</sup> 内山節 (2015) 『内山節著作集 増補 共同体の基礎理論』一般社団法人農山漁村文化協会 p.63-64
- <sup>20</sup> 内山節 (2015) 同上書P.59
- <sup>21</sup> イディス・コップ [黒坂三和子、村上朝子 訳] (1986) 『イマジネーションの生態学』p.23-30
- <sup>22</sup> 三澤勝衛 (2009) 『三澤勝衛著作集2 地域からの教育創造』農文協 p.23-31
- <sup>23</sup> 一般に、画一的な人工林よりも遷移の進んだ天然林の方が生物種の多様性が高いため、子どもの遊び場にとっても、豊かな生態系を有する健全な森づくりが必要だと言える。
- <sup>24</sup> LEAFは、持続可能な社会のために、森の持つ生態的・社会的・文化的・経済的な側面について理解を深めることを目的とした、森の中での体験を重視した北欧発祥の森林環境教育プログラムである。ホームページ (<https://www.feejapan.org/leaf/>) には幼児向けアクティビティの検索もあり、必要に応じて参照いただきたい。
- <sup>25</sup> 澤口俊之 (1999) 『幼児教育と脳』文春新書 p.86
- <sup>26</sup> 榎山知弘 (2005) 『もりのなかでこどもはかがやく』林野庁北海道森林管理局 p.6